
某日的一幕

砂町 峰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

某日の一幕

【Nコード】

N1193L

【作者名】

砂町 峰

【あらすじ】

【私と親友と友人と、家族とモブな人々が織りなす日常の一幕。有り得そうであり得ちゃいけない、そんなお話をお届けします】

『三月某日の一幕』の続編？的なものです。小ネタを挟み、微妙なノンフィクションを描いていきたいと・・・でもやっぱりフィクションかも。主人公の名前が違います。作者すっかり考えました。横着したら結構恥ずかしかったので・・・。友人たちの苗字はそのままです。基本不定期更新ですが日記小説的に、こまめに書いていき

たいと思っています。

開幕に際しての簡単なご紹介（前書き）

えー、書いてみたら意外と話がたまったので連載にします。

よろしくお願いします。

開幕に際しての簡単なご紹介

皆さん、心底不思議な体験ってしたことありますか？

例えば、幽霊を見たり。

例えば、ドラゴンに遭遇したり。 あり得ないから

例えば、臨死体験したり。

例えば、UFOに拉致られたり。 うーん・・・どうだろう

ありますか？そんな体験。

え？私？

ははっ

有りませんよ、あつたらヤバイでしょ。 実際。

正気保ってられませんよ。

私のスモールバードなハートを舐めないでください。

何故か友人たちからの評価は「鋼鉄に毛が生えた心臓」のようですが。

誤解も甚だしいですね。

そんな私がお話するのは、ほんの些細な事ばかり。

些細な不思議。

些細な危険。

些細な不幸。

些細な災難。

些細な被害。

あれ・・・何か悪いことばかりだ。

何か目から塩辛いものが・・・。なんでだろー！。

外から見て、もしくは鋼鉄心臓に毛が生えたところの話じゃない友人たちが些細と言っても、渦中の私からすれば大事件で、かなり参ったこともありますよ。

でも、たまにあったんです。

些細な幸せ、ってやつが。

生きてることが嬉しい、とか。

無事生還出来ました神様ありがとう！とか。

美味しいもの食べれた！とか。

まあ色々ありますが。

もう一度言いますね？

私がこれからお話するのは
何だか有り得そうな
それでも絶対なさそうで
話題になっても七十五日
そんな些細な事ばかり。

そんな某日の一幕を、お届けしたいと思います。

第一幕 我が眠り妨げる者、の事情（前書き）

一話目投稿。

のんびりよろしくお願い致します。

第一幕 我が眠り妨げる者、の事情

私の朝は、遅いです。

いえ、違いますよ？ちゃんと学校に行ってますから、サボってません。

遅いのは、休日の朝。我が家は母と弟意外、みーんなねぼすけなんです。

あと私だけですけど。

まあ、細かいことは置いておいて。とにかく、私は休日の朝は寝て過ごす決めてるんです。

母も弟も、何もいません。彼らは理解しているのです。

私の眠りへの執念を。

起こされても寝て、布団剥がされても寝て。水かけられても構わず熟睡。

体が育って力持ちになった弟に、無理矢理食卓に運ばれたことも有りますが。食べながら寝るといふ器用なことをしてみたら、諦めてくれたようですね。

母としては、父親に似た性質を何とか改善させたかったとか。でも弟同様、ガクリと手を突いて諦めてくれました。

わかればいいんですよ、わかれば。

まあ、休日に予定が入っている時はちゃんと起きるんですよ？前日に言っておいてもらえれば、ちゃんと。

予約制です。

まあ、今日は何の予定も入っていませんし。生意気な弟は彼女とデートだそうですから、因みに母も職場の方々とちよっくらレジャーだそうです。

アクティブですねー。

そんなこんなで、平日の学校生活でくたびれた体を睡眠で休めています。私は元気ハツラツ永久の体育会系の人々とは違い、のんびり文化系ですから。休日は家でゆっくりしたいんです。

インドアです。

ピロピロピロピロ

「んん？」

ピロピロピロピロ

何か鳴ってますねー、でも寝ます。嫌な予感がするので、意地でも寝てやります。

ピロピロピロピロ

「うー・・・」
ピッ

携帯の着信音でしたね、やっぱり。しかもこれだけ飽きずに鳴らすのは、正直思いつく人が二人しか居ません。片方は出ないとまずい人で、もう片方は気の長いお方です。

「・・・んー、あいもしもし」

「出掛けるぞ」

出ないとまずい方でした……。

「予約はいつてなかったよー、から寝る」

「予約が居るって、有名店気取りか。三十分以内に行くから」

「小林様ー、だから疲れてるんだってば」

午後からでもいいではないですか、と主張しますが。しかし相手は小林様、ぶっちゃけ勝てた試しがありませんです。

というわけで今回も。

「じゃあ三十分後に」

と言って切られてしまいました。

いやはや、最後のお声は何ともドスの聞いたデンジャーなものでした。流石です小林様、私が認める危険人物のダントツトップは伊達じゃありませんね！

「うがー……」

切れた携帯電話を恨めしく見つめていても意味はないので、私は大人しく起きることにしました。

うふふ、こつやって起こされるのは何回目でしょうか。三度なんてとつくに超えていますね。

でも残念、私はクリスチャンなんです。だから、七十七回まで我慢しますよ。

小林様、ネズミだって猫を噛むんですからね？

「おはようござーます」

「きっかり三十分、偉い偉い」

小林様からの一ラブコール（脅迫電話）の後、顔を洗って服を着て、菓子パンをお口に放り込んで自宅はマンションの一室を出た私。

マンションの前の道路には、国産車が一台。結構お高いやつですね、羨ましいですコンチクショウ。

そしてお車の前まで行くと、助手席のロックが開く音がしたのでそのまま乗り込みました。

運転席にはもちろん件の小林様。あと4回同じことをしたら、私に愛想をつかされる横暴人間です。

意外と後がありませんね！。

私もびつくりしました。十年日記にメモをしておいて良かったです。

「今日は何をするの」

「機嫌悪いな・・・」

ええ悪いですよ。眠いですから。

わかってんならアポくらい取ってくださいね。

ついでに朝からお綺麗な顔で無駄に爽やかでないでくださいよ、

心底殴りたいです。

「伊藤が入院したからその見舞い、あと食事と買物」

「伊藤さん、今度はどんなポカしたのさ」

「さあ？遠藤が自業自得だって言ってたか」

伊藤さんとは、私の友人である遠藤さんの部下の方です。いやはや暑苦し　いえ、体格のよろしい方で、中々にお茶目な面もござい

ます。

どうやら今回もその延長のようですね。

まあ、伊藤さんは怪我がしょっちゅうなので驚くことでもありません

ん。遠藤さんも意外と面倒見が良いものです。

「食事、はいいけど買い物は嫌だなあ」

「何で？」

何故と言いますか。ではお答えしましょう。

「遠藤さんと、小林様のタッグが恐ろしいから」

・・・ええ、彼らのタッグは非常に恐ろしいです。買い物に連れていかれ、連れ回され、着せ替え人形ばりにひどい目にあいます確実です。そして大量の荷物が家に届く！

確実です！

こいつらは金有り余ってるせいで金銭感覚おかしいんですよ。対して私は小市民、小鳥のようなハートでは開き直ることもすらできません。

故に

アンタらの買い物なんて誰が付き合つかー！ー！！
つてなわけですよ。

いや、自分の買い物しとけって話で。

そんな気分の私に対する、親友こと小林様のお答え。

「諦めたら？」

・・・わあー、素晴らしいお言葉ですね。私、感服して握りしめた拳から血が滴りそうです。

「本人が言わないで欲しいなー」

青筋ビキビキってやつですね。

あ、表現古かったですか？すみません。

そしてニヤリと笑う小林様。無駄に麗しいので雰囲気ありますね。

ああ・・・、どうせろくな事言いませんよこいつ。

「じゃあ俺はやめる。遠藤を止めてみな」

「無理でっす！」

瞬時に判断出来る私、すっぱらしい！

無理だろっ、あの人異常に意志が強いし！嫌だと言ったら「じゃあ後日二倍返しで」とか言っちゃう人ですよ！？

そして実行しちゃう人ですよ？

ってか二倍返しって何だよ！

「諦めな」

「・・・適当なところで救出よろしく」

「わかってる」

わかってますよ、遠藤さんより常識を持っているっらしい小林様が、いつも適当なところで止めてくれているのは。

でもですよ？

そもそも買い物なんてしなければ、と思う私って間違ってるんでし
ようかね？

間違ってるんですか？

第一幕 我が眠り妨げる者、の事情（後書き）

因みに、友人のキャラは実在です。少しオーバーにしていますが、まあこんな感じだと思つものを書いていきます。

誤字脱字訂正、苦言甘言ご感想。 随時受付中ですので、どうぞ宜しくお願い致します。

第二幕 風邪っぴきの頭の中は

皆さーん、元気ですかー？

私は今ー、自宅のベッドの中に居まーす。流行りの風邪にヤラれてしまいましたー。

流石私、流行の最先端を行っておりますね。

まあ、自分で買う衣服はほとんどユニークですけど。まあいいじゃないですか、易くて適当に着まわせれば。

いいじゃないですか、ユニーク。

最近じゃあ、フランスに支店を出したとか言ってますし。

おフランスですよおフランス、アムールの国ですよ。

「姉^{あね}えー、俺もう行くぞー？何時まで寝てんだよ」

「・・・勝手に行きやがれ、餓鬼」

荒んでますね、私。普段ならもうちょっと優しく言ってあげられるんですが・・・風邪ですし、高熱ですからね。

「まだ着替えてねえの？」

ノックも無しに部屋へ入るなこのエロ餓鬼、彼女の裸で我慢しやがれってんですよ。

思うんですけどね、登校十分前になって姉が風邪だとやっと気付く弟ってどうなんでしょうかね。

今だって、真っ赤なお鼻ならぬお顔の私を見て「寝坊助も大概に」とかほざいてやがるんですよ。ぶっちゃけ、健康体だったら殴って

ますね。

いや、関節外すくらいでいいかな？

まあ結局、こんなことを考えるのは健康体じゃないからで、頭ぶっ飛びな自覚があるからですが。

「風邪引いた、さつさと学校行け」

「はあ？風邪？」

「煩い、訊き返すな」

察しろ馬鹿弟、お前はそれでも私の血縁者か。

「確かに風邪だな」

口調が荒くなっている私を見て、ようやく弟は理解したようです。

私、風邪の時は億劫なので口調が荒くなるんですよね。よく幼児化する方がいらっしやいますけど、私はとことん荒みます。

枕元に置いてある、主張用の体温計の温度を見て弟は唸っています。結構高いので、仕方ないですね。

「病院行くかー？」

「ウザイ」

訳：億劫だ、面倒だ、行きたくない。そこまで気を回さなくていい。中々意味を含ませた会話です。普段なら瞬時に姉弟戦線勃発ですが、今の私は病人。弟はそれなりに看病の経験を積んでいるので、ニッコリと微笑んで。

「三音で無駄に主張してんじゃねえ」

とか言いました。その含んだ笑顔、ちょっといつもの小林様に似ていらっしやいますねー。

まあ、あの方とは格が違うので全く怖くありませんが。伊達に親友やってみせよ、いくらなんでも慣れますからね。

「放つとけ」

訳：心配してくれるのはいいですが、いい加減遅刻するので学校にさっさと行きなさい。貴方の姉は大丈夫です。でも薬は置いていてね。

「いや、流行りの風邪だと行かないとまずいだろ」

「む・・・」

しかし弟は何気に鋭い指摘をしてきました。うーむ、賢くなりましたね。

流行りの風邪、自分でも引つかかった自覚があります。民報のニュースで延々放送していた症状とガッチリ当たってしまったていますからね。

最近疲れが溜まっていたので、仕方が無いとは思っていますが・・・。

「む」

「学校に連絡してくるから、寝てろよー？」

いたし方ない、弟の言う通りに行きたくありません。母が出張中なので、自然弟に面倒をかけてしまうのが申し訳ないですね。

弟が私の欠席連絡と、自分の遅刻連絡をしに行ったので。モゾモゾと布団から出て、暖かい服を着こみました。汗をかいても平気なように、厚手のパーカーにスポンをはいてベッドにゴロリ。

うー、辛いですね。

何で弟は風邪を引かないのに、私は引くんでしょうか。不思議です、生命の神秘と言えます。

馬鹿は風邪を引かないと言いますが、弟は馬鹿なんでしょうか。

いえいえ、意外と頭がよろしいんですようちの弟は。ついでにアウトドア体質なので運動得意です。

殴りたくなってきました。

私と違って、顔の造りがハッキリしているのも気に入らない。高校生の方で彼女とニヤンニヤンとは、身の程を知らない奴の所業ですね。けしからんです。

「姉は俺の親父か？」

口から出ていましたね、部屋へ戻ってきた弟に聞かれていました。

そして弟、あんたは何故私服だ。私を病院へ連れて行ったら即学校に向かうというのに、私服では学校に行けないだろう。

「服」

訳：何で私服を着てるの。病院へ行ったら直ぐに学校に行きなさい。

「一日目だろ、俺も休むぞ。それとも一人で死亡が好みなんか、姉」

「むう……」

「母さん居るんだっいたらいいけどさ、出張だろ。ほれ、さっさと歩け」

結局、熱で頭が回らないせいか弟にやりこめられる頻度が増してきます。

くっ、無念……。

病院から自宅へ戻り、休息を求めてベッドへダイブ。気持ちイイですねー、布団がひんやりしています。移動で体を動かしたので、いくらか熱が逃げて行ってくれたようです。

このまま下がるといいのでしょうか、そうはいきませんでした。

三時間後 ……

「おい姉ー、大丈夫かー」

熱、四十を超えました。ヤバいです、体中ギツギシイってます。流行りの風邪特有の関節痛が私の体に侵略してきたっばいです。何としても、本丸だけは守り通さねばなりません！

私は布団をべロリと剥がされ、弟に不満げに視線をやりました。

「さむい」

寒いんです、本当に。熱が高すぎるせいで、布団が無いと真冬に水かぶって素っ裸で外に出てる気分です。

「熱上がってるから、布団はなし。ほれ、脇に布巾挟め」

「つめたい」

対して弟の処置は非常に適切なのですが、私はぶっ飛んだ状態なので非常に気に入りません。仕方ないと思う気持ちもありながらも、弟を睨みつけるのが止められない止まらない。

薬を飲まされ布団を剥がされ、寝衣の前を肌蹴られ、濡れ布巾を脇に挟まれて手首足首に冷え　夕。

ぶっちやけ拷問ですよ。

「仕方ねえだろ・・・、熱あんだから。湯だつて死にたくなかったら我慢」

うう、この鬼畜！姉を苦しめてそんなに楽しいか！

そんな事を思う反面、辛抱強く看病してくれる弟に感謝の気持ちをはんのり感じていました。

更に二時間後　・・・

「薬効いたか、流石に」

やーっと安心出来そうなところまで熱が下がってきました。体温計を見た弟も安堵の息を・・・

うう、随分と心配をかけてしまいましたね。面目ない。

「出てけ」

訳：もう大丈夫だから、うつるといけないので自分の部屋へ行きなさい。

それでもやっぱり、億劫なんですよね喋るのが。

「何かあつたら呼べよー」

それでも何も言わず氣遣つてくれる弟、何と姉孝行ものであることか……。

（高熱の時に何を考えていたかはかなり曖昧です。後日看病していた人 主に弟 から指摘されることが多く、かなり申し訳ない思いをしています）

「む、スマン」

学校を休ませて、散々手間をかけさせてしまう姉を許しておくれ。そんな思いで侘びますと。

「いいって」

弟だし、と妙な理由を付け加えて部屋から出ていきました。

ありがとう……。

出て行く時の、真つ赤なお耳を姉は忘れませんよ。本当に可愛い性格に育ってくれましたね。

幼い頃からの、教育（洗脳）の賜物ですね。

あ、ちょっと誰ですか勝手にルビふつたの。人間きが悪いですね。

誰だつてやるでしょうに。

我が家の家族構成は母、娘と息子が一人づつ。

働き者の商社勤務の母は、中々に忙しいお方。

そして私、母曰くののんびり屋、弟曰くの寝坊助。

二つ下の弟は、面良し頭良し運動神経適度に良しの彼女もち。風邪を引いたら手厚い看病をブスくれながらもやっつけてくれる可愛い子です。

弟の名前は優二、我が家の優しい二番目の子。末っ子なのにたいして甘えてこない、面白い生き物です。

そんでもって私の名前は飯方初実。飯方家に初めて実った子供です。中々洒落が効いていますよね。

風邪っぴきなので、今回は我が家の紹介までに。

それでは、お休みなさい。

第二幕 風邪っぴきの頭の中は（後書き）

まさかの連日投稿。結構書きやすいです。

第三幕 憂鬱と暗躍と

はあゝ……。

「おーい、姉？どうしたため息」

目の前で手がふられているような気がしますね、幻でしょう。

はあゝ……。

「マジでどうした。もしやあれか、遅咲きの春ってやつか？」

バキィッ！！！！

「ぐおっ！？」

ああ、いけないいけない。私は基本温厚かつ忍耐強い癒し系マイペースキャラとして生きようとしているのに、弟の発言がムカついたからと言って殴ってはいけませんね。

いや、しかしここは弟のためにも心を鬼にして挑むべきでしょうか……？

鉄拳制裁というものに。

「癒し系って、図々しいにも程があるだろ……マイペース意外どれひとつとして掠ってねえし」

黄金の右拳二発目、投入しました。

「さて、前回やっと名前が出た優二君。私の弟である君は今、妙なことを宣ったね？訂正しなさい」

「いや、その口調おかし……わかつたよ、訂正するからさ」
おやおや、そんなに震えてどうしたんです我が愛しの弟君。お姉さんの右拳はそう簡単に振り下ろされるものではないですよ？
メリハリのきいた、私よりも数倍ランク上に生まれてきたお顔が真っ青ですねー。

殴っていいでしょうか。

「で、何あつたんだよ」

気を取り直したのか、優二は私に訊ねてきました。そんなに機嫌が悪いなら、なにかあつたんだろうと言ってきていますが。別に私、機嫌が悪い訳じゃありませんよ？

少し、腹の底が煮えくり返り状態なだけで。

……え？それが機嫌が悪いってことだっけ言うんですか？

ははっ、錯覚ですよ。

この程度で機嫌が悪いとか表記してたら、作者が私の大激怒を表現出来なくなってしまうではないですか。それじゃあ可哀そうでしょう？

作者を思いやり、忍耐力のある私は機嫌が悪いとかそういうことではないと表現してあげているわけですよ。

とっても情け深いですね、私。

「優二、男って根絶やしに出来ないかな？」

「え、何だよその異常な発言。どんだけやさぐれてんだよ」

異常とな？いやいや弟よ、そんなことはありませんよ。
常々思っていたのですから、通常ですよ。

「そつという問題じゃねえし!？」

そついう問題ですよこのド畜生めが、私は今人類の約半数に非常に苛立ちを感じているんです。黙って土下座でもしたらどうですか。

「いや、何があったんだよ姉」

・・・ほう、何がと聞きますか？ではお答えしましょう。

「電車は魔窟だ・・・」

「痴漢にあったのか」

弟は、「またか」とため息を吐いて頭をかいています。よくあることなので反応も薄く、非常に気に食いませんね。

「関節極めた程度じゃ収まらない・・・あいつらどうしてくれよう」

「いや、充分だろ」

ほう・・・？

女である私にとっては、毎日の満員電車での御約束は苦痛以外の何ものでもないといえますのにな。こいつの彼女にチクってやりましょうか。

『我が弟は、痴漢を仕方ないことだと気にしない奴』だと。

「明らか濡れ衣だろっ、妙なことを考えんなよ姉！」

「さあ、今の彼女の電話番号が携帯に入っていたね。ちよつくら電話をかけようかな。ミナちゃんてよかつたね」

うふふふふ、弟よ。姉をなめてはいけませんよ、歴代の彼女さん達とは密かにメルアド交換をして弟よりもロングセラーなメル友なんですからね。

もちろんのこと、オフ会もやっていますよ。その名も『飯方優二歴代彼女の会』、先月のオフ会では現役のミナちゃんも参加して楽しみました。

つまり毎月やっているんですね、これが。

「何だよそれっ、初耳・・・ってか止める!!」

弟は女の恐ろしさというものを思い知ったようです。顔を真っ青にしながらこちらの携帯を取り上げようとしてきますね。

これに懲りて、少しは彼女と長続きしてほしいですね・・・。

「うっ・・・それは、姉には関係ないだろ。とにかく止めるよ」

「わかってるよ、冗談だし。・・・後でにしとくか」

「今何かボソツと言ったる!」

言ってませんよ?失礼な。空耳と言っやつですね。

「・・・で、何だよ。痴漢にあつて、その他に何かあつたのかよ」

おやおやどうしたんでしょう、そんなにつかれた顔をして・・・哀れですね。

お前のせいだとか指さしてないで、ほら。私の説明を聞くんですよ。

事の発端は、今日の朝。通学のための電車の中でのことでした。

満員電車の御約束、とでもいうかのようにね、遭っただですよ。痴

漢とやらに。

いつものことなので、スムーズに関節極めをして悲鳴を上げさせることで犯人を特定。「あの痴漢です」と指さして周りの方達に捕まえてもらいました。

電車がホームに滑り込み、その駅で降りて色々と事後処理だかなんだかをしていたわけですが・・・。まあ、個人情報を渡せば示談に運ぶという話になったわけ。

さすがに、直ぐに警察に・・・まあ犯罪者なんですけどね?

「そいつの名刺を取っておこうと思っただけだね、誤魔化したんだよ」

「誤魔化し?」

「誰かの・・・会社関係か何かの人の名刺渡そうとしたんだけど。」

社章胸につけながら違う会社の人の名刺渡すってどうよ？」

見た感じは三十代前半位のサラリーマン。普通にスーツを着て、凡庸な顔立ちをして。所謂モブ的な存在なわけで。

非常に親近感が湧いたというわけでもないけれど、一応示談で済ませようという私の配慮を・・・

配慮をあの屑は・・・

しかも直ぐにバレるような嘘を吐いて誤魔化そうとする小賢しさ。

しかも使用した名刺は取引相手のものだったそうで・・・。

他人に罪を着せるのと同じな行為に私は盛大にキレ、笑顔で駅員さんに通報を求めました。

「うわー、馬鹿だろそいつ」

「だから、免許証写メってやったさ」

警察に通報した以上は必要ないですが、もしものために個人情報もしっかりゲット。

優二も、男の方を馬鹿だと言うだけでやりすぎだとは言いませんし、当然の対応だということですね。

「おお、頭いいな」

そうでしょうそうですね。

警察に連れられて行き、前科一般のハンコを押されたわけです。

「お陰で遅刻だった」

そして、そんなことをしていれば当然のごとく遅刻なわけで。あとの事は警察に丸投げしたとは言え、一限には間に合いませんでした。

それにしても、なぜこうも頻繁に痴漢に遭うのか・・・。二週間に一回は警察に御厄介になっている気がしますね。うーむ。

「姉いつつもギリギリだからなあ、時間変えたら？」

まあ、それが一般的な対策なのでしょうが……。

「痴漢の為に時間を変える？嫌だね、絶対」

犯罪者のために睡眠時間を削る？ありえません。

「んじゃあ、どうすんだよ」

「それで考えてんの」

優二は呆れているようですが、女の沽券にかかわるんですよ。

何とか対策を打ち立てたいところです。

「俺は部活あるからな、頑張れ姉」

優二の朝練の無い日は一緒に登校するため、痴漢に遭うこともないわけですが……。護衛ついでに毎朝一緒に登校するには、私が今より一時間ほど早く起きなくてはならず。

ぶっっちゃけ嫌です。

そもそもですよ？

「つたく、私の尻なんぞ揉んで何が楽しいんだかね」

心底理解できませんね、こんな凡庸な体型の尻を揉んで得られる快感で何なんでしょう？もつと肉感的な女性の尻を揉めばいいでしょうに。

尻とか揉むとか下品でした。すみません。

それにしても、わかりませんね！。

「……いや、楽しいかどうかは置いて気持ちはわかるかもな」

「何？」

んん？弟には心当たりが？

「んーにや、何でもなし」

しかし、訊き返した途端首を振られました。

残念です、理由がわかれば改善しようもあるものを……。

「そろそろ夕飯か・・・」

気づけば、もう良い時間です。夕御飯を作らなければ。

「お、そだな。飯飯ー」

私と優二は、夕飯を作るべく飲んでいたコーヒーマグを持ち、リビングのソファから台所へと向かいました。

我が家では、母親が滅多に家に居ないので姉弟二人で食事を作ります。優二が部活の時は別ですが。

同日・初実就寝後

「　　ということがあったんですよ」

優二はいつものように、姉の友人である小林に電話をかけていた。

「それで？」

「それだけです」

姉が今朝痴漢に遭ったこと、犯人の様子など聞いた限りのことを小林に報告し、反応を待つ。

沈黙は然程長くない。向こう側の判断を下す早さが、姉に関しては一貫していることを優二は知っていた。

「その写真、こっちにまわせ」

「はいはい、了解」

小林の要求に軽く応え、優二はすぐさま姉から回された相手の免許証の写真をメールで送った。

「いやー愛されてるねえ、姉も」

写真が確実に送られたという確認メールを見ながら優二はひとり「ちた。」

変り者姉のさらに上に行く変り者である友人・小林に、姉の有事を

伝えるのはこれで何度目だろうか。

些細な事柄から、結構深刻なケースまで。自分では話さなくとも弟から漏れていることを姉は知らない。優二も知らせていないし、小林の方もわざわざ話題に出したりはしないだろう。

優二が知らせた以上は今回の痴漢の犯人である男も、無事では済まされないに違いない。社会的に抹殺されるか、別の方法で酷い目に遭わされるか・・・そのどちらかだろう。

「怖っ」

優二は自分の想像に肩を震わせた。

姉の友人、小林の対応はいつも冷静である。ちらりと除いた限りでは、姉には随分と優しい対応をしているようなのに、それ以外への対応は異常に厳しい・・・というより冷酷。

優二に対しても、弟であるということと比較的ましな対応だが、報告するときあの威圧感はどうにかならないものだろうか。

はつきり言っつて、面倒を嫌う姉があ的小林と友人であり続けられる理由が分からない。付き合いくいことこの上ない人種だろうに。それでも、優二が毎回電話をかけて報告を欠かさないのは、小林に言われているから　という理由を隠れ蓑にして、優二自身が姉に危害を加えた者が許せないからだったりする。

姉の手前、やりすぎだと茶化したりしたものの。関節固めくらい何だ、というのが本音である。

「俺も大概・・・シスコンだよなあ」

自覚はしてるんだよなー。と一人ぼやきながら、優二は布団に潜り込んだ。

照明の落とされた室内に、やがて寝息が一つ聞こえ始める。

どうやらこの日も、飯方初実の周りは努めて不穏であるようだ。

・・・まあ、彼女の与り知るところではないが。

第三幕 憂鬱と暗躍と（後書き）

う、うーん・・・やってしまったかもしれない。
まずいかな、どうしよう。

感想待っています。

第四幕 友人達の会合

とある都市、とある広いマンションの一室。

いや、一室というのには憚られる程に広い高級マンションのワンフロア。高層ビルのような建物の一階丸ごと使用したこの部屋は、賃貸の一月分の家賃だけで随分と金がかかる。

豪華な部屋に、集まっているのは五人の人物。誰もがとある人物を友人に持つ、複数の男女である。

「最近、忙しそうだよな」

「まだ学生だ、仕方ねえだろ」

眼鏡の、サッパリとした顔つきの青年の言葉に、この中で一番の年長者であろう男性が答える。

仲間内では、大塚、遠藤とそれぞれに呼ばれている。

「受験でしょう？大変よねー」

メリハリのある容貌と、体を持つこの中で唯一の女性も口を開いた。佐藤と呼ばれるこの女性は、自分も辿ってきた苦勞を思い出し、今それを味わっているであろう友人に思いを馳せる。

「犯罪心理学、だっけ？濃いよなあ・・・」

茶髪の、華やかな容姿をした青年も口を開いた。赤塚、と呼ばれている彼は仲間内では

「筋肉馬鹿とは違うのよ」

と呼ばれる人物である。因みに、好きな事はスキー。

「小林ー、お前は何か言わねえの？」

「何をだ」

「いや、何か」

必要ない、と切り捨てた青年は随分と期限が悪いようだ。だまって、目の前に置かれたワインのグラスを傾けている。小林、一部では小林様と呼ばれる見た限りではこの中で一番に容姿の整った人物である。

今日の集まりの主役は、何を隠そう彼なのだが……。ある人物がこの場に居ないことによつて、その機嫌は最高潮に悪い。黙って酒を飲み、料理をつついていた。

五年前に同じ状況であつたならばおそらく、ここまで機嫌を悪くするということもなく。また、それなりに機嫌よく話していたのだろうが……。

恐るべき事に、たった一人の友人の存在が今となつては自分達のムードメーカー的ポジションに立っているという事実。

彼の友人は、決して……。決してキャラクター性が濃いつつでもなく。また、特に際立つた容姿を持っているわけでも勿論無い。まあ、犯罪心理学を嬉々として研究するというのは随分と濃い部類に入るのだろうが……。

そんな、チャームポイントとも言えるものなど自分達にとっては霞と同じ。良くも悪くも、『濃い』という表現すらもう既に超越していると自覚があるのだ。

なのに、彼の友人の言動には全員で影響される。要は、悪目立しているのかもしれないが。

そもそも、この集まりの中にいて個性が埋没せず。あまつさえ主張までこなすのは既に、大分普通から逸脱しているような気がする。

一般、普通といったような括りで判別するのは難しい。常識や慣習に完璧に倣う人間なんぞ異常である。

しかし、『普通の人』というものは必ず存在する。というか、社会の大多数がそれであることを知っている。

彼の友人、飯方初実は『普通の人』であり。

そして同時に『一般の異常』であった。

普通に生き、一般に埋没しながらも非日常に踏み入れる余地を持つ。一般と異質の間をゆらゆらと、まるでそう・・・綱渡りのように生きていく。

片方に揺れようが、またすぐに自身の均衡を取り戻す。超越的なバランサー。

要は、懐が深いのだ。

非日常と日常を一度に許容するキャパシティ。それが彼女の特性であり、そしてそれ故に自分達は友人としていられるのだ。

どんな突飛なことをしようが、ぶつぶつと怒りながらも結局『ハイハイ』と嘆息して流され流してくるのだから。

普段から対人関係においては処世術やらなんやらでしか他人と付き合っていけない自分達にしてみれば、居心地の良いことこの上ないのである。

「本人は、あくまで普通だと認めたいみたいだけど・・・」

「無理があるな」

「確かに。こう言っちゃ可哀想だけど、私もそう思うわ」

遠藤の言葉に小林が同意し、佐藤も申し訳ないとは思いつつも同意に頷く。

何かをやらかしてみる度に、「常識を考えろ」「心臓が保たない」

「厄介ごとを持ち込むな」などとギャアギャアわめきたてるくせに、結局最後は「今度だけだからね」と言って許してくれるのだ。

たまに、面白がって積極的になったりすることもあるが。

まあ、結局。

「お人好しって事だなあ」

飯方初実はお人好しなのである。

五人の友人達は此処に居ない六人目の友人を思い出し、全員でうんうんと最もらしく頷いたのだった。

本人が聞いていれば、どう言ったのかは知らないが。

数分後～～～

「なあ、どうするよ」

「今年はスキーにするか？」

「あんた、いつつもスキーじゃない」

「いや、いいだろ」

「どうしたんだ小林、アウトドアに趣旨がえか？」

「たしか、飯方が好きだったはずだ」

「なるほど」

「じゃ、春はスキーって事で」

「『『『『賛成』』』』」

三月某日の一幕に続く

第四幕 友人達の会合（後書き）

一応、『三月某日の一幕』の前の話と言う事で書きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1193/>

某日的一幕

2010年10月9日23時02分発行